美術の窓（115）

写楽はいつ、どこで描いたか

大和文華館館長　浅野秀剛

来年4月に東京国立博物館で開催される特別展「写楽」のゲスト・キュレーターを引き受けた。今、大和文華館の仕事を別にすれば、そのことで頭のなかがいっぱいである。写楽は誰かということについては、私たち研究者の間では能役者の斎藤十郎兵衛ということでほぼ一致している。しかし、作品研究は、意外にもまだまだ基礎研究を進める余地が十分にある。役者絵でいえば、誰のどの役を描いたものであるかという点についてはほぼ解明されつつある。しかし、まだ未解決の問題が多く残っている。そのひとつが、写楽は役者絵の下絵（浮世絵版画の場合、絵師は輪郭線を清書した版下を版元の了解のもとに彫師に渡す。その版下の基になるのが下絵である。）をいつ、どこで描いたかという問題である。

そのことが、具体的に論じられ始めたのはここ二十年くらいであるように思う。それまでは、漠然と、興行の初日に舞台が開いたのを見て、下絵を描いたとイメージされていた。いやそうではなく、初日の前に、楽屋など特別な場所で、特別に役者にポーズを取ってもらい、下絵を描いた可能性もあるのではないか、ということを私は主張し、それがだんだんに受け入れられてきたのである。写楽が、いつ、どこで描いたかという問題は、どういう情報によってどういうふうに作画したか、という問題に直結するので、基礎研究の根幹に関わることなのである。初日の前に描いて版画を制作したとすれば、描いた役者の演技が、何らかの都合で実際の舞台では実現しなかったこともあり得る。極端な例をいえば、描かれた役者が、病気のために一度も舞台に立つことがなかったということもあり得るのである。写楽の場合、さすがにそこまでの事例は見出せないが、写楽出現から遡ること二十数年前の、文調や春章にはそのような作品が残されている。

今、写楽の第3期の作品の考証を進めている。第3期とは、寛政6年（1794）11月の顔見世興行に取材した作品58図である。そのなかで最も早く版下が制作されたと考えられるのが、河原崎座の「松貞婦女楠」に取材した細判7図である。なぜなら、第3期の作品の多くが「写楽画」と署名しているのに対し、その7図だけが第1期・第2期と同じく「東洲斎写楽画」と署名しているからである。その7図のなかに、紅葉の木の下でポーズを取る仕丁姿の3人を描いた細判3枚続がある（図1）。仕丁とは、宮中や貴族の雑役をした人で、烏帽子水干姿で表わされるのが通例であった。写楽の3枚続は、役者の紋と似顔から、右から順に二代目小佐川常世、三代目市川高麗蔵、四代目岩井半四郎を描いていることを疑う余地はない。しかし、その配役が残された歌舞伎資料と合わないのである。

「松貞婦女楠」の興行に関する資料として現存しているのは、役者絵を除けば、顔見世番付、役割番付、絵本番付、長唄正本と二種の役者評判記がすべてである。それらと照合すると、写楽の描いた場面が四立目浄瑠璃「神楽月祝紅葉衣」の場面であることが判明する。所作事、つまり踊りの場面である。しかし、役割番付、絵本番付と二種の役者評判記のどれを見ても、その場面に出演した幹部級役者は、三代目市川高麗蔵、四代目岩井半四郎、二代目岩井喜代太郎、初代尾上松助の4人で、二代目小佐川常世は出演していないのである。その場面は、三代目市川高麗蔵の新田義貞実は小山田太郎高家、四代目岩井半四郎の神祇官兼好が妹千はや、二代目岩井喜代太郎の先帝の上わらわ勾当の内侍の三人の所作の後、四代目岩井半四郎の鎌倉稲村が崎のおひな娘おとまと初代尾上松助の湯浅孫六入道貞虎による名所咄の所作があった。この時、四代目岩井半四郎は千はやとおとまを早替りで演じた。前半三人の所作は、千はやが義貞と勾当の内侍の恋を取り持つというもので、千はやと義貞は烏帽子仕丁姿で紅葉焚きの趣向であったようだ。勾当の内侍の烏帽子姿は確認できないものの、勝川春英の細判作品「二代目岩井喜代太郎の先帝の上わらわ勾当の内侍」は、短冊を捧げ持つ水干姿となっているので、三人で紅葉焚きの趣向の所作事を演じた可能性が高い。「短冊を捧げ持つ水干姿」は写楽の描いた常世の姿とも一致する。

結論をいえば、番付と評判記、そして他の絵師が描いた作品のすべてが、勾当の内侍を演じたのは常世ではなく喜代太郎となっているのである。とすれば、写楽は、なぜ喜代太郎ではなく、常世としたのであろうか。その理由として考えられるのは二つ、一つは単なるミス、もう一つは、写楽はかなり早くに取材して版下を描き、版画を制作したが、初日直前になって配役が変わり、実際の興行と合わなくなったというものである。「初日直前になって配役が変わ」ったという資料が出現すれば、後者の仮説が裏付けられるのであるが、それはまだ出現していない。

写楽の作品研究は、未だ発展途上といってよいのである。

図1　東洲斎写楽「二代目小佐川常世、三代目市川高麗蔵、四代目岩井半四郎」（『原色浮世絵大百科事典』第11巻、大修館書店、1782年、より複写）

季刊 美のたより No.173
平成23年1月6日
発行　大和文華館

Copyright ⓒ2011 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.